

## 特集

# サシバやオミナエシ、オオルリシジミの将来は？ ～里山の暮らしがささえた野生動植物とその危機～

堀田 昌伸・尾関 雅章・須賀 丈（自然環境部）

気候が温暖で降水量も豊富な信州では、自然の移り変わりとして、身の回りにある草地は疎林へ、疎林から森林へと変わっていきます。里山の雑木林や草地、谷地田は、この自然の移り変わりを人が長く利用・管理することで作りだされてきたものでした。しかし、戦後のエネルギー革命以後、生活が大きく変わり、生活のために里山は利用されることが少なくなりました。里山の明るい雑木林や野草地は大きく姿を変え、里山の自然に依存していた生物の生活の場が失われていきます。これが「第2の危機」です。

長野県版レッドデータブック（維管束植物編 2002 年刊行；動物編 2004 年刊行）（以下、県版 RDB）で指摘された植物の絶滅の危険性のうち、第2の危機に関すると思われる「自然遷移」が 18% となっています。畦畔などの草地に咲くオキナグサや秋の七草に含まれるキキョウなど、身近にあった植物が、その生育地の変化・消失により絶滅危惧種となりました。2007 年に改訂された環境省のレッドリストでランクが上がった植物をみると、草地や湿地生のもが多く含まれていました。



オキナグサ。日当たりのよい草原に生える多年草。県版 RDB で絶滅危惧 I B 類。環境省レッドリスト (2007 年) では絶滅危惧 II 類。

一方、脊椎動物の絶滅危惧の要因で第2の危機に関するものは、県版 RDB によれば、耕作放棄 (3%) や草原の減少 (3%) であり、すでに県内から消失したコジュリン、絶滅が危惧されている草原性のコヨシキリやノビタキ、谷地田のある里山を利用するサシバなどが代表的な種です。2006 年改訂の環境省レッドリストでは、ランク外から絶滅危惧 II 類になったサシバをはじめ、チゴモズやアカモズなど里山に関する種が多くランクアップしました。

県版 RDB を昆虫などの無脊椎動物についてみると、特にチョウ類で草地の森林化が絶滅危惧の要因として多く指摘されており、この傾向は絶滅の危険度の高いランクほど大きくなっています。過去 30 年以上県内で

記録のないオオウラギンヒョウモン、ヒョウモンモドキ、条例で保護され地域の方々の手で生息環境が維持されているオオルリシジミ、チャマダラセセリなどがその代表例です。



獲物を巣に運ぶサシバ。谷地田とそれを取り巻く林が適切に管理されている里山に住む猛禽類。県版 RDB 及び環境省のレッドリストで絶滅危惧 II 類。

人口の減少や耕作放棄地の増加などにより、里山の自然は今後さらに変化し、そこに生息する動植物の危機も今後さらに増大していくのではないかと思います。

こうした第2の危機に対する県の取り組みの一つとして、里山に生育する絶滅危惧種、たとえばササユリなどの保護回復事業をとおして、地域の方々や保全団体などによる森林整備、火入れ・草刈りによる野草地の維持などの活動を支援していきたいと考えています。また、「森林づくり県民税」による間伐の促進なども進められています。



火入れによる草原環境の保全（霧ヶ峰で）

しかしこの危機の根底には、食料や原材料、燃料を輸入し、加工して生産・輸出する経済に暮らしが大きく依存するようになり、農地や里山の生物資源の利用が大きく減少したことがあります。より根本的な対策として、それらの生物資源の適切な利用・再生のしくみづくり、それらをささえる地域づくりや消費者との連携のしくみづくりがもとめられています。